

【2020年】

2020年初頭から新型コロナウイルス感染症の影響により、諸種の活動の計画変更が必要となった。ただし、オンライン会議システム等を活用することにより目的の達成を目指した。

2020年5月までは、ワークショップの結果の取りまとめを進め、今後のレシピ集の作成に向けた情報の収集と整理を行った。特に、これまでプロジェクトを実施するなかで得られた知見として、伝統野菜、養蜂に対する潜在的な社会的ニーズが高いということと、消費者、生産者のいずれも、生産、調理に関する知識を国を超えて共有することを希望していることが分かってきたため、これらの知見を考慮し、Web ページへの発信に向けた準備を進めた。

レシピ集作成の方向性としては、これまで行ったワークショップで得られた変化（伝統野菜をめぐる日中韓のネットワークの拡大や伝統野菜のイメージの具現化、当事者意識の醸成等）をレシピ集の作成と同時に進めた。

2020年7月には、伝統野菜の振興策、調理を題材とした日中韓での学び合いの一環として、各地の伝統野菜について公開ウェビナーを実施した。日中韓の専門家の発表に加え、沖縄の高校生が島野菜について独自に調査を行った結果を発表するなど、次世代育成にも注力し、共感の醸成に向けた具体的な取り組みを進めた。トヨタ財団の関連するプログラムにこれまでもかかわってきた静岡大学の富田涼都氏、マレーシア国民大学のエリック・オルメド氏も発表。プロジェクト内外の参加者と活発な意見交換をすることができた。当日の参加者は約60名にのぼった。

2020年9月には、沖縄県、大分県の高校生、プロジェクト参加者の世良が高校生の頃に指導を行った三重県出身の大学生が交流するウェビナーも開催した。伝統的な製品の学びの実践について報告、情報交換を行い、地域を超えて製品の情報を共有することによる共感の萌芽の醸成方法について手掛かりを得た。その結果、日中韓のレシピ集の構築に向けてオンラインでのコミュニケーション・ツールを活用しながら活動を展開することができ、2021年に延期されたCOPに向けた情報交換・発信を継続的に行うことができた。具体的には、これまでのワークショップ等の成果をウェブサイトでの発信を行い、レシピ集の成果報告、最終的なワークショップなど成果の取りまとめについても、同ウェブサイトで発信し、プロジェクト終了後も成果を発信し続けることにつなげ、関連する取り組みの基礎としたい。

